

田園

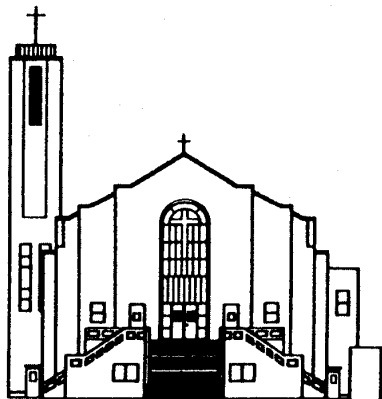
聖フランシスコ カトリック田園調布教会

(No.704. 2022.4.1)

カトリック田園調布教会報

☎03(3721)7271

〒145-0071 東京都大田区田園調布3-43-1



ミサと癒し

協力司祭 トマス小平正寿神父

◆ 語源について

「傷が癒える」とか「いやしの湯」とか、よく耳にすると思いますが、同時に「自然はいやす」という昔からの言い伝えがあった、ラテン語で「natura sanat」と言い、sanatは、いわゆる sanatorium(サナトリウム)の語源になっています。東京近郊の山の中腹には、大きなラテン文字で NATURA SANAT と彫られた巨岩がありますが、これを発見した時には「わが意を得たり」と思いました。確かに、森林浴という言葉があるように常に自然に囲まれながら生きていければ人間にとって最良のことかもしれません。さて、欧米でよく使われる病氣見舞いのカードには、「get well soon (英語)」とか「prompte guerison (仏語)」というのがあった、これには「早く良くなってくだ

さい」という言葉が使われています。興味深いことは、ヴァチカンが出版した「カトリック教会の教え」の中で、「いやし」という言葉を使って秘蹟についての項目を扱っていることです。私の持っているイタリア語版の中では「guarigione」と言う言葉が使われていますが、これはフランス語の guerison, 英語の healing に相当するものです。

◆ 現代の傾向

現代は「いやしの時代」と言っても過言ではないでしょう。書店に入るといわゆる「いやし」に関する本とか、「いやしグッズ (CD や DVD、音楽など)」で溢れています。これらのものは必ずしも病氣の方向けのものではなく、むしろ寂しさを抱えて生活している高齢者とか一人暮らしの方々のため

でもあって、声をかければ、ワンワンと言
いながら寄ってくるぬいぐるみの犬とかも
あるのです。

❖大自然は人を癒す

今でも、田舎に行くと、清らかな水に、
温かな太陽に、恵みをもたらす雨に、手を
合わせて感謝する人々がいます。その光景
を見るとほっとします。まだ人間の心が残
っていると思います。朝早く起きて、野良
仕事に出かけ、日没とともに家に帰るので
す。そこには、都会のような喧騒はなく、
群衆もいません。その代わりに、大自然と
面と向かって生きている人たちがいます。
心から本音で会話する数人の仲間がいます。
その仕事のきつきさにもかかわらず、元気で
す。大自然というおおきなふところに抱か
れて癒されているからです。
それが都会であろうと田舎であろうと、も
しあなたが心のうちに神をいただいていた
ら、人生はどんなに変わることでしよう。
大自然にもっとも近い方こそ神だからです。

❖イエス・キリストの時代

医学が今のようには発達していなかった2
000年前には、人々はいやしを必死に求
めていたに違いありません。だからこそ、
キリストは公生活の初めに、まずこの要請
にこたえたのでした。いやしを下さるギリ
ストのもとには多くの人々が殺されました。
福音書に出てくるイエスと病人との会話に
はいつも何か共通のものがありません。つま
り、「何を望むのか?」、「どうしてほしいの
か?」、と言うイエスの問いかけに、「目が
見えるようになりたいのです」とか「子供
が死にそうです、来て治してください」な
ど、いやしの願いを懸命に訴えます。いや
された人々にイエスは言います。「あなたの
信仰があなたを救った。安心していきなさい」と。
イエスのこのいやしは更に霊的な
部分にまで及んでゆきます。『床をとって
歩け』と言うのと、『あなたの罪は赦された』
と言うのと、どちらが易しいか」という福
音のくだりはこれを良くあらわしています。

❖初代教会において

教会はその歴史の最初においてすでに
「癒しの式」を行っていました。聖書に次
のようにあります。「あなた方のうちに、苦
しんでいる人がいるなら、その人は祈りな
さい。喜んでいる人がいるなら、その人は
賛美の歌を歌いなさい。あなた方のうちに、
病人がいるなら、その人は教会の長老たち
を呼び、主の名によって油を塗って祈って
もらうようにしなさい。信仰による祈りは、
病人を救います。主はその人を立ち上げら
せ、もし、その人が罪を犯しているなら、
その罪は赦されます。あなた方が癒される
ために、互いに罪を告白し、そして祈り合
いなさい。正しい人の祈りは大きな力があ
り、効果があります」(ヤコブの手紙5・13
- 16)。

❖ミサ聖祭の犠牲の上に成り立つ癒し

したがって、キリスト教的いやしとは
神によるいやしにほかなりません。人間に
はできなくても、神におできにならないこ
とはないのです。神も痛みを知っているか

からです。「罪を除いて私たちと同じになってくださったキリスト」は喜びも悲しみも痛みも感じることできるまことの間でもあったのです。さらに聖書には、「まことに、彼はわたしたちの病を担い、わたしたちの苦しみを背負った。彼の上に下された懲らしめが私たちに平和をもたらし、彼の傷によつてわたしたちは癒された」（イザヤ書53・4-5）とあるように、主イエスの十字架の犠牲こそが私たちにいやしをもたらしました。癒し主が打たれることによつて、わたしたちに癒しがもたらされました。これは私たちに人間には理解しにくい「神の痛み」の神秘」であります。全能なる神が私たちの癒しのために自ら痛みをお引き受けになったのです。

◆秘蹟と癒し

秘蹟は特に神の救いのパワーのチャンネルとして選ばれたので、それらが癒しのチャンネルであることに不思議はありません。病者の塗油、ゆるしの秘蹟そして御聖体の三つの秘蹟は特に癒しに向けられています。

そして叙階の秘蹟は癒しの力を司祭に与えます。また、わたしはしばしば洗礼の秘蹟が人々を癒すのをこの目で見てきました。ここで、特に病者の塗油について一緒に考えてみたいと思います。ご存知のとおり、以前は「終油の秘蹟」と言われていました。以前は「終油の秘蹟」と言われていました。これが、これではまるで亡くなる直前にしか施されない印象を与えます。典礼の刷新によつて、秘蹟の目的は「癒し」にあると宣言されました。教皇パウロVI世は「ヤコブの手紙に照らし合わせて、秘蹟の効果が十分に表明されるように秘蹟の書式を変更することがふさわしいと思う」（病人のパストラルケーヤと塗油：研究テキスト II：1973年度典礼に関する米国司教委員会発行、および、使徒的憲章の聖なる塗油からの引用）と述べられました。

上に述べた変更は第二ヴァチカン公会議の典礼憲章第73番によつて施行されました。このようにして、「終油の秘蹟」から「病者の塗油」へと名称が変わったのです。参考までに、旧教会法と新教会法の比較をここに載せてみましょう。「最終の塗油は、

信者が理性を働かせるに至った後、病気、または高齢のために死の危険にあるときでなければ、これを施すことができない」（旧教会法第940条第1項）。「理性を働かせるに至った後、病気または高齢のために危険な容態が始まっている信者に病者の塗油を執行することができる」（新教会法1004条第1項）。確かに言葉の持つニュアンスが変わってきています。

◆本当の癒しを求めて

人生の目的はただひとつであつて、それは神の愛の真実を知り、さらにそれを深く体験することであり、それなしにはわたしたちは人生の最終目標を見失つてしまふでしょう。わたしたちの人生の法則はこれです：つまり、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」。これがわたしたちの人生で最も重要な第一の掟です。神がわたしたちから愛されるべき存在であることを理解するのは難しいことではないでしょう。わたしたちが真・善・美を求めるように創られて

いるのは、神がまさに真・善・美そのものだからです。もちろん、実生活では、このことをいつも意識していかないかも知れませんが、人は誰でも無意識のうちに真の幸福と永遠の命(究極の癒し)を望んでいます。そして神だけがこれを与えて下さることができるのです。アシジの聖フランシスコのように神を愛せたら、どんなに素晴らしいことでしょう。

第二の掟も、これと同じように重要です。つまり、「隣人を自分のように愛しなさい」しかし、現代において、このことほど守られていないものはないでしょう。みんな自分のやりたいようにやっていて、自分も干渉されたくないし、他人のために何かをしてあげるのも好みません。わたしたちの生きている社会はいわばバラバラの社会です。みんなをひとつの家族にしたいという神の望みは忘れ去られているのです。

キリスト者であるわたしたちの生と死はキリストに結ばれています。十字架上で息を引き取った後、イエスは墓に収められまし

た。イエスを憎んでいた人々は自分たちが勝ったと信じていました。イエスを愛していた人々はイエスの次の言葉を思い出していました。つまり「人の子は人々の手に渡され、殺される。しかし、三日目によみがえる」。

わたしたち人間の欠点のひとつに早合点ということがあります。神にはそういうところがありません。ゆっくりと、しかし確実に言葉を実現させていくのです。イエスの身の上に起こったことは神の計画でした。こんにち、イエスの復活をめぐっているいろいろな意見があります。

わたしたちにも将来があり、神の計画があります。これらを前にして、わたしたちは果たして、どういう生き方を、あるいは死に方を選び取っていくのでしょうか。光り輝く勝利へと向かうのでしょうか。暗闇と憎悪の悲劇に向かうのでしょうか。神とともに愛を選び取るのでしょうか。それとも孤立して無に帰していくのでしょうか。

今の選びが、わたしたちの生き方を、そして終わりを決めることになるのです。



司祭団からのメッセージ

ご復活祭を迎えて

ドミニコ竹内正美神父

皆様、ご復活おめでとうございます。

昨年同様、今年も聖なる三日間と復活祭はコロナウイルス感染拡大のため、典礼も盛大儀式でなく、簡素化された儀式になりました。それでも皆さんと共に復活祭を喜びのうちに迎えることが出来ました。

復活祭を迎える度に、何時も思い出すことがあります。子供の頃、話の中でよく聞かされたことは祖父たちが迫害を逃れて、五島の今の田舎に住み着いたこと、難儀しながら畑を開墾し、半農半漁で生計をたてたということでした。

子供の頃、こんな辺鄙なところに来てまでも信仰を守ろうとしたのが不思議でならなかったこと思い出します。昔の人々が命

を懸けて守り通した信仰とは何だったのか。それはまさしくキリストの復活信仰にあったと言えます。

「五島、五島へと皆行きたがる。五島優しや、土地までも」。迫害を逃れて信仰を生きる場所として長崎、大村、西彼杵方面から櫓をこいで五島に渡ったというのです。命を懸けても惜しくないという自分たちの信仰を彼らはどのように受け止めていたのでしょうか。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」(ヨハネⅡ、25-26)。の言葉を生活の基盤として受け入れてきたからだと思えます。

信仰に生きるというのは本当に凄まじいものだと感じ入ります。復活についての事実を見つめ、信仰の確認することが復活祭を迎える正しい迎え方ではないでしょうか。イエスの復活について聖書を読んできますと、私たちの注意をひく一つのことがあります。それは弟子たちが、全く予想

しなかったことに出会ったように、驚いたり、恐れたりして、イエスが復活したことをなかなか信ずることが出来なかった点です。

「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。誰にも何も言わなかった。恐ろしかったからである」(マルコ16、8)。「使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった」(ルカ24、11)。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみれば、また、この手をその脇腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」(ヨハネ20、25)。トマスも弟子たちも婦人たちもイエスの復活を信じる心の余裕などありませんでした。

この事実、イエスの復活が弟子たちの心の中から、あるいは弟子たちの期待する思いの中から生まれてきたのではなくて、全く彼らの思いの外に、彼らの心の外に起きた出来事であったことを聖書は一致して語っています。

弟子たちの恐れと驚きと疑いを述べるこ

とで、イエスの復活が如何に弟子たちの心の外に起こったか、しかも弟子たちが予期していたことではなかったことを聖書は力強く述べています。私達も今一度「復活信仰」を新たにし、キリスト者としてしっかりと歩んで行きたいものです。

主の復活への希望

アウグストヌス桑田拓治神父

主の御復活おめでとうございます。しかし、この原稿を書いているのはウクライナで軍事衝突が起きているときなので、素直に復活の喜びを原稿に書くことがためられる状況です。ニュースで停戦交渉の内容が伝えられますが、対話になっておらず、むなししい会話がなされているように思われます。対話において重要なのは異なる意味・価値観を互いにすりあわせて新たな共通の意味・価値観に到達しようとする事です。

これが成立するためにはお互いへの尊敬が不可欠です。対話の道を閉ざし、暴力によって現状の変更を試みることは信仰と福音に敵対する「死の文化」と言わざるを得ないと思います。その意味ではイエス様の受難も暴力による現状の変更であったといえます。しかし私たちには主の復活への希望があります。主の復活への信仰は私たちに隣人との新しい関係性・価値観の希望の道を開いてくれるのではないのでしょうか。皆様がこの原稿を読んでおられるとき、地上に平和が訪れていることを祈りたいと思います。

ともにガリラヤへ

アントニオ金東炫神父

『驚くことではない。ナザレのイエスは復活なさって、ここにはおられない』（マルコ 16・6）続いて福音書は次のように私たち

を招きます。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお目にかかれる』（マルコ 16・7）

復活された主は、再びガリラヤへ行き、弟子たちをお呼びになりました。ところで「ガリラヤへ行く」とはどういう意味でしょうか？

まず「再び出発する」という意味を表します。弟子たちにとって失敗からのやり直しは、主がお呼びになった最初の場所に戻ることでした。復活された主は再び弟子たちをお呼びになり、これからも共に歩むことを望まれました。これが復活されたイエスの最初のメッセージです。

そして「ガリラヤへ行く」ということは「新しい道に進む」という意味も含まれています。

私たちの信仰は記憶によるものと言えますが、習慣や過去の出来事は私たちを感動さ

せることができません。しかし「ガリラヤへ行く」ということは、イエスの過越によって用意された新しい命の道に足を踏み入れ、生き生きとした信仰に生きることです。これは復活されたイエスのもう一つのメッセージです。

イエス・キリストの過越は、私たち一人一人がすべての失敗を乗り越えて再び出発できるような用意してくださった新しい道であり、その道への招きです。

2022年、今という時は、COVID19の大流行と平和が脅かされている不安な時であると感じられますが、希望を失わず、再び旅に出ようと促しておられる主イエスと共に、新しい旅を始める時でもあると思います。このイエスの過越への招きにも応えましょう。

私たちの希望である復活された主イエスからの祝福が豊かにありますように。
主のご復活おめでとうございます！

2022 成人式

1月9日 13時より成人式のミサが執り行われました。男子4名、女子5名の新人が晴れ着や正装と改まった装いで、司祭から祝福を受けました。

昨年に続き本年もコロナ禍で祝賀会を催すことはできませんでしたが、今後の大人としての益々の活躍をお祈りしております。

教会委員会



オーギュスタン美術館

トゥルーズ（フランス）

写真・文 柳沢洋子

旅のできない今、今月も10年前の旅の記憶からトゥルーズの美術館をご紹介します。

トゥルーズはフランスで人口第四番目、飛行機のエアバス本社がある大都市です。

私はこの町が目的地ではなく、田舎を回った後に飛行機に乗るために二度通りましたが、スペイン国境にも近く、日差しも強く、とても暑かった思い出があります。

それは二度とも、飛行機の時間までと思つて、駅から30分程歩いて、オーギュスタン美術館に行き、つい時間を忘れて見入つてしまったため、帰りは駅まで走つたので余計に暑くなつたからでしょう。

ガイドブックなどを見ると赤レンガの建物が多いため、「バラ色の街」などありますが、私は今でもこの地名を見るだけで、汗

が出ます。

オーギュスタン美術館は元々アウグスチノ会の大きな修道院の建物を美術館にしているため、収蔵品も多く、特に中世彫刻の展示ではフランスで最大です。

私は中世ロマネスク（10-12世紀頃）の彫刻が好きで、それを見るために旅を繰り返しているのですが、トゥルーズに行くのなら、暑い街中よりもこちらがお勧めです。修道院の建物ですから、中庭に当たる部分が回廊形式になっています。

回廊とは中庭を囲み、空だけが見える所を修道士たちが、祈りながらぐるぐる歩くようにできていますが、スペイン国境ピレネー山脈を越えてサンチャゴ・デ・コンポステラをめざす巡礼者達の宿泊にも使われました。

アウグスチノ会は病人を癒すための薬草を得意としていましたので、どこのアウグスチノ会でも中庭には薬草が沢山植えられています。

特にオーギュスタン美術館の中庭は広く、とても涼しく気持ちの良い所です。



中世彫刻は特に柱頭（柱の天辺）が多く、写真を見ていただくとお分かりのように、林のように並び、それも大人の背丈より少し上位なので、細部まで良く見ることができます。

完全な形で残っているものもありますが、多くは顔が欠けたりしているのは、革命時に破壊されそうになったものを、心ある人たちの手によって、色々な教会から、篤志家の家や、近隣の農家の納屋などに隠されたからだそうです。



聖書でおなじみの場面なので、お顔が欠けていても、良く分かります。

ロマネスクの彫刻は一見コミカル、漫画チックな表現ですが、これは偶像崇拜禁止にしばられ、写実に描かないと言う当時の考え方もあったでしょう。でも、この方がとても親近感があり、私が遠くまでうつっている理由です。



写真の聖母子像は中世ではなく、もっと時代の下ったものですが、とても愛されていて、絵葉書が何種類も売られています。

普通の聖母子像ですと、マリア様が幼子の方を見ているか、幼子を私たちの方に顕示しているかと思いますが、この聖母子像はマリア様と幼子が全く別の方向を見ています。

マリア様の表情は苦し気で、幼子の担っているものを見つめて、聖書にあるように「いめぐらして」いるようです。

一方、幼子はどこの公園でも見かけられるような赤ちゃんの光景で、膝に乗せられ、何かを見て、満足気です。

一見、何気ないような、今でも普通にある光景でありながら、マリア様の悲しそうな表情だけで、何を表しているかが感じられる、私の好きな聖母子像です。

集められた彫刻の中でも多いのは、最後の晩餐やサロメの話ですが、それに次いでキリストの復活を信じなかったトマスの場面です。2種類の写真を載せますが、どちらもトマスがキリストのお腹の傷に手を伸ばしているところです。



一方はキリストの御顔もトマスの顔も欠けてしまっていますが、キリストが「ほら！」とでもおっしゃりそうな勢いで手を挙げています。もう一方もトマスの顔が欠けてしまっていますが、衣の裾がなびいているなど美術的表現は高度になっています。どちらがお好きでしょうか？

最後にご紹介するのは「勝利のキリスト」です。

御顔は欠けていますが、隣に天使の翼も見え、御復活なさり、勝利の旗を持っていらっしゃることで分かります。

ただ私は初めて見た時に、お風呂からよっこいしょと出てきているのかと思いました。不謹慎ですね。ごめんなさい。

